

中山秀三郎博士の 帝國學士院入り

今春古市公威博士が逝去されて以來、學者として最高の權威を網羅する帝國學士院に土木工學に關する會員の缺げてゐた事は如何にも淋しい事であつたが、去る十二月十二日の同院定例總會に於て、第二部補缺會員の選舉が行はれた結果、我が土木學界の權威たる中山秀三郎博士が新會員に當選され、爰に赫々たる名譽を添ふる事となつた。

中山博士は明治二十一年東京帝國大學土木科を卒業し、直に關西鐵道の建設工事に從事して桑名草津間を完成し、同二十三年の秋、東京帝國大學の助教授となり、鐵道講座を擔任されたが、其後河川港灣の講座を擔任する事となり、之が爲に明治二十九年歐米に留學を命ぜられ、二ヶ年の後歸朝して、以來約四十年間東京帝國大學工學部に教授として在職し多數の専門學徒と技術家を薰陶し其間に博士の調査研究になつた工事及び論文も多數に存してゐる。

中山博士は先に土木學會の會長となり、又港灣調査會議員であり、現在東大名譽教授であり、正三位勳二等の我國土木學界の元老である。

中山博士は平素胃腸が弱い爲、公會の席には殆んど出席されない、本郷西片町の清居でひたすら攝生につとめてゐられる。然し中山博士の頭髪は常に黒く、小軀童顔の容子は病弱の博士とは何うしても見えない。之は博士

の精神的修養と攝生の力であると思はれる。讀書は博士の唯一の趣味で、土木に關する雑誌なども大概なものは目を通じてゐられる様である。それ故に土木に關する研究や人事の動向は靜かにちつと眺めてゐられる。

一昨年土木學會が臨時總會を開いて古市博士を名譽會員に推薦する時中山博士は久しぶりに鐵道協會の講堂まで出かけられ古市博士推薦の辭を述べられたが、其時の熱と力のある聲と態度は、とても病弱の老博士とは思はれぬ程であつた。

古市博士の靈も中山博士の今日あるを、さぞ満足されてゐる事だらう。我々雜誌人としては博士の權威に接觸する機會は甚だ稀であるが、それでも中山博士は事ある毎に親切に指導を與へられた。寛に大家の襟度として我々は常に敬意を表してゐた。今日名譽ある帝國學士院會員に當選せられたに對し我等又滿腔の祝意を表する次第である。

(一記者)



工學博士 中山秀三郎氏